

第3回ライブニッツ研究会発表要旨

予定調和の綻び——ライブニッツのリスク管理論——

佐々木 能章(東京女子大学)

ライブニッツは秩序の人である。自然を探求する方法も、諸学をまとめる普遍学の理念も、社会的組織の建設の構想も、いずれも秩序の体現を目指すものである。しかもその秩序は必ず多様化と一体化している。この秩序を目指す方向の集大成こそが「予定調和」と呼ばれるものである。だがこれは単に大枠の大原理として奉られるだけのものではなく、常に個別の事象においてさえその原理の発動が確認されるようなものである。そしてこの原理は、少なくとも人間の視点から理解しようとするならば、絶えざる前進を求めている。何もせずともうまくいくはずだといった能天気な姿勢は、ライブニッツのオプティミズムとは本質的に無縁の発想である。

このようなライブニッツの思考法を、「リスク」という視点で捉え返してみるのが、本発表の意図である。リスクは、ある意味で秩序の乱れであり、多くの場合、避けたくても避け難いものとして存在するものである。ここには、人間の理解の限界という問題が大きく関わる。このリスクに対処する方法として、知識の問題や社会制度の問題などが互いに関連することになる。現在、リスク論は多くの分野で論じられ、それらを総合的に検討するための「リスク学」の構築さえもが試みられている。しかし現況では、リスクそれ自体の定義からして分野ごとにずれがあり、したがってまた、リスクの扱い方もばらばらといったありさまであって、総合化にはほど遠い。そこに立ちほだかる難問の一つは、おそらく分野間の方法論や学問理念の相違である。ここでは、ライブニッツの思考法に学ぶところが大きいように思われる。

発表においては、ライブニッツが直接言及しているわけではないが、リスクという視点で理解し直すことができそうな場面をいくつか取り上げて、そこでのライブニッツの思考法の特徴を読み解くことで、リスク論を考えるためのヒントを得ることを試みる。

第一の場面は計算機作成である。ここでは技術面でのリスク論が見られる。第二の場面はハルツ鉱山開発計画である。ここには人工施設と自然との間に設定されたシステムにおけるリスク論が実践とともに模索されている。第三の場面は保険制度である。これは、人間の予想できないという意味での偶然事象に対処するための人間の共同作戦が制度として考案されている。第四は政治問題である。知の目的を人間の幸福におくライブニッツが現実の政治を見まわし、さらに国際関係を歴史的に振り返る中で、社会の中にあるさまざまなリスクをどう克服するか検討されている。

これらを通覧することによって、ライブニッツのリスク論の特徴と意義を明らかにしたい。